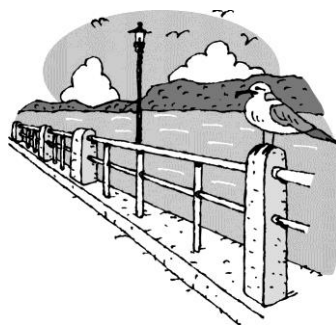


七月のテーマ
喜働



え・小島サエキチ

目はどこに 向いているか

経 営コンサルタントとして、顧客リピート率100%の実績を上げている安澤武郎（やすざわたけろう）氏。人生の核として打ち込んできたのが、アメリカンフットボールです。

スポーツ推薦ゼロの京都大学で、学生日本一を二度経験。オールジヤパンにも四度選出されました。アメフトから学んだこととして、安澤氏は「正解を探すより、自分の選択を正解にする」という姿勢を挙げています。

正解がわかってから動くのでは遅いアメフトの試合。多少のリスクを冒しても、これだと思いう動きにかけ、一步踏み出したら、その選択を正解にするよう動く――。自らの経験に基づくこうした理論が、氏の経営コンサルティングの原点になっています。

その安澤氏が今、多くの企業と接する中で、「停滞する企業では、本来の目的や成長が失われている」と実感しています。

「経営者やベテランなど先頭を走る人が成功体験に縛られ停滞する

と、組織の活力は失われます。それを見ている若い社員も失敗を恐れて新たな挑戦をしなくなる。過去の成功体験を捨てて挑戦することが必要なのです」

では、なぜ成功体験を捨てて挑戦できない企業があるのでしょうか。それは、目を向ける先が会社のため、もしくは自分のためになっているからではないでしょうか。

本来、企業が存在するのは、お客様や地域に貢献するためです。これはいつの時代も変えてはならない「不易」の面でしょう。

そのお客様に喜んでいただくために、時代によって変わる年度方針や商品、サービスなど「易」の面があります。自社にとっての易と不易を正しく捉え、「お客様に喜んでいただくには」という熱意とサービスの発信が、企業の更なる発展へと還元されるのです。

最も己を大切にすることは、自己の個性（たち）を、出来るだけ伸ばして、世のため、人のために働かすことである。それには、仕事をなまけ、研究を怠り、身をおし

んでいては、とても出来ることではない。『万人幸福の琴丸山敏雄』この言葉は、世のため人のための働きこそ、自分を大切にすることに繋がるのだと教えてくれます。人を大切にできずに、自分も自社も大切にはできないでしょう。

昨年末に内閣府が世界七カ国（日本、韓国、米国、英国、ドイツ、フランス、スウェーデン）の若者に行なった意識調査によると、「自国のために役立つことをしたい」と答えた日本の若者の割合は、54・5%にのぼり、七カ国中、一番多かったそうです。こうした若い世代の秘めたる思いを引き出し、形にするのが企業であり、経営者の役割でしょう。

まずはトップたる経営者が、自身の内面を見つめ、目を向けるべき優先順位を再確認して、世のため人のために行動していく時、社員も一丸となって、現状を打破・改善していく活路が見出されるのではないのでしょうか。

参考資料…『朝日新聞』5月26日「あの人とこんな話」、『産経新聞』5月26日「内閣府意識調査」